

感染症発生動向調査事業報告書

—平成23年版—

山梨県福祉保健部

目 次

I 山梨県感染症発生動向調査事業概要

1 感染症発生動向調査事業	1
2 対象感染症	
(1) 全数把握対象	1
(2) 定点把握対象	2
3 地域区分と定点医療機関数	3

II 患者発生状況

1 全数把握対象感染症	4
2 定点把握対象感染症	5
(1) インフルエンザ定点から報告された感染症	6
1 インフルエンザ	6
(鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く)	
(2) 小児科定点から報告された感染症	7
2 RSウイルス感染症	8
3 咽頭結膜熱	9
4 A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	10
5 感染性胃腸炎	11
6 水痘	12
7 手足口病	13
8 伝染性紅斑	14
9 突発性発しん	15
10 百日咳	16
11 ヘルパンギーナ	17
12 流行性耳下腺炎	18
(3) 眼科定点から報告された感染症	19
13 急性出血性結膜炎	19
14 流行性角結膜炎	20
(4) 性感染症定点から報告された感染症	21
15 性器クラミジア感染症	21
16 性器ヘルペスウイルス感染症	22
17 尖圭コンジローマ	23
18 淋菌感染症	24

(5) 基幹定点から報告された感染症	25
19 細菌性髄膜炎	26
20 無菌性髄膜炎	27
21 マイコプラズマ肺炎	28
22 クラミジア肺炎（オウム病を除く）	29
23 メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症	30
24 ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	31
25 薬剤耐性緑膿菌感染症	32
26 薬剤耐性アシネトバクター感染症	33

III 病原微生物検出情報

1 ウイルス検出状況	34
2 細菌検出状況	35

IV 参考資料

1 感染症発生動向調査の指定届出機関一覧表	36
2 全数把握対象感染症の報告数	38
3 定点把握対象感染症の報告数と定点当たり報告数	39
4 平成 21 年と 22 年における定点当たり報告数の比較	40
5 定点把握対象感染症の定点当たり報告数の推移	41
6 感染症発生動向調査の調査報告週対応表	42

I 山梨県感染症発生動向調査事業概要

1 感染症発生動向調査事業

平成 11 年 4 月施行の「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」（以下「感染症法」という）により、従来行われてきた感染症サーベイランス事業が充実・拡大整備され、新たに感染症発生動向調査として行われた。（感染症法第 3 章 感染症に関する情報の収集及び公表、第 12 条、第 14 条）

その後、平成 19 年 4 月に感染症法の改正があり、発生動向調査の対象疾病の再分類や結核予防法の統合等、大幅な変更があった。また、平成 20 年 1 月から風しん及び麻しんは五類感染症の定点把握の対象から五類感染症の全数把握対象に変更された。5 月には鳥インフルエンザ（H5N1）が二類感染症に追加されるとともに、感染症の類別に新型インフルエンザ等感染症が追加された。平成 23 年 2 月にはチクングニア熱が四類感染症に、薬剤耐性アシネトバクター感染症が五類感染症（定点）に追加された。

山梨県では情報を週及び月単位で収集・分析し、関係機関に還元するとともに、ホームページを通じて県民に公開している。

2 対象感染症

平成 23 年 12 月末現在、全数把握対象は 77 疾患、定点把握対象は 26 疾患の計 103 疾患を調査対象としている。

（1）全数把握対象（77 疾病）

	対 象 疾 病
一類感染症（7 疾病）	(1) エボラ出血熱、(2) クリミア・コンゴ出血熱、(3) 痘そう、(4) 南米出血熱、(5) ペスト、(6) マールブルグ病、(7) ラッサ熱
二類感染症（5 疾病）	(8) 急性灰白髄炎、(9) 結核、(10) ジフテリア、(11) 重症急性呼吸器症候群（SARS、病原体が SARS コロナウイルスであるものに限る）、(12) 鳥インフルエンザ（H5N1）
三類感染症（5 疾病）	(13) コレラ、(14) 細菌性赤痢、(15) 腸管出血性大腸菌感染症、(16) 腸チフス、(17) パラチフス
四類感染症（42 疾病）	(18) E 型肝炎、(19) ウエストナイル熱（ウエストナイル脳炎を含む）、(20) A 型肝炎、(21) エキノコックス症、(22) 黄熱、(23) オウム病、(24) オムスク出血熱、(25) 回帰熱、(26) キャサヌル森林病、(27) Q 熱、(28) 狂犬病、(29) コクシジオイデス病、(30) サル痘、(31) 腎症候性出血熱、(32) 西部ウマ脳炎、(33) ダニ媒介脳炎、(34) 炭疽、(35) チクングニア熱、(36) つつが虫病、(37) デング熱、(38) 東部ウマ脳炎、(39) 鳥インフルエンザ（H5N1 を除く）、(40) ニパウ

	イルス感染症、(41)日本紅斑熱、(42)日本脳炎、(43)ハンタウイルス肺症候群、(44)Bウイルス病、(45)鼻疽、(46)ブルセラ症、(47)ベネズエラウマ脳炎、(48)ヘンドラウイルス感染症、(49)発疹チフス、(50)ボツリヌス症、(51)マラリア、(52)野兎病、(53)ライム病、(54)リッサウイルス感染症、(55)リフトバレー熱、(56)類鼻疽、(57)レジオネラ症、(58)レプトスピラ症、(59)ロッキー山脈紅斑熱
五類感染症 (16 疾病)	(60)アメーバ赤痢、(61)ウイルス性肝炎 (E型肝炎及びA型肝炎を除く)、(62)急性脳炎 (ウエストナイル脳炎、西部ウマ脳炎、ダニ媒介脳炎、東部ウマ脳炎、日本脳炎、ベネズエラウマ脳炎及びリフトバレー熱を除く)、(63)クリプトスポリジウム症、(64)クロイツフェルト・ヤコブ病、(65)劇症型溶血性レンサ球菌感染症、(66)後天性免疫不全症候群、(67)ジアルジア症、(68)髄膜炎菌性髄膜炎、(69)先天性風しん症候群、(70)梅毒、(71)破傷風、(72)バンコマイシン耐性黄色ブドウ球菌感染症、(73)バンコマイシン耐性腸球菌感染症、(74)風しん、(75)麻しん
新型インフルエンザ等感染症 (2 疾病)	(102)新型インフルエンザ、(103)再興型インフルエンザ

(2) 定点把握対象 (五類感染症・26 疾病)

	対 象 疾 病
小児科定点 (11 疾病)	(76)RSウイルス感染症、(77)咽頭結膜熱、(78)A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、(79)感染性胃腸炎、(80)水痘、(81)手足口病、(82)伝染性紅斑、(83)突発性発しん、(84)百日咳、(85)ヘルパンギーナ、(86)流行性耳下腺炎
インフルエンザ定点 (1 疾病)	(87)インフルエンザ (鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く)
眼科定点 (2 疾病)	(88)急性出血性結膜炎、(89)流行性角結膜炎
STD 定点 (4 疾病)	(90)性器クラミジア感染症、(91)性器ヘルペスウイルス感染症、(92)尖圭コンジローマ、(93)淋菌感染症
基幹定点 (8 疾病)	(94)クラミジア肺炎 (オウム病を除く)、(95)細菌性髄膜炎、(96)ペニシリン耐性肺炎球菌感染症、(97)マイコプラズマ肺炎、(98)無菌性髄膜炎、(99)メシチリン耐性黄色ブドウ球菌感染症、(100)薬剤耐性アシネトバクター感染症、(101)薬剤耐性緑膿菌感染症

3 地域区分と定点医療機関数

本県の人口及び医療機関の分布を考慮し、罹患状況を報告する患者定点と病原体検査のための検査材料を採取する病原体定点を下表のように設定した。(参考資料1「感染症発生動向調査の指定届出機関一覧表」参照)

		中北	峡北支所	峡東	峡南	富士・東部	計
患者 定 点	小児科定点	8	5	4	2	5	24
	インフルエンザ定点	13	8	7	3	9	40
	眼科定点	3	2	2	0	2	9
	STD定点	3	2	2	0	2	9
	基幹定点	3	2	2	1	2	10
	合計	30	19	17	6	20	92
病 原 体 定 点	小児科定点	2	0	0	0	1	3
	インフルエンザ定点	1	1	1	1	1	5
	眼科定点	1	0	0	0	0	1
	STD定点	0	0	0	0	0	0
	基幹定点	3	2	2	1	2	10
	合計	7	3	3	2	4	19

II 患者発生状況

1 全数把握対象感染症

山梨県及び全国における平成 23 年の全数把握対象感染症の報告数を参考資料 2 に示した。

《一類感染症》

報告はなかった。

《二類感染症》

二類感染症 5 疾患のうち結核 141 例の報告があり、前年に比べ 14 例少なかった。

《三類感染症》

三類感染症 5 疾患のうち、腸管出血性大腸菌感染症 11 例の報告があった。

《四類感染症》

四類感染症 42 疾患のうち、A 型肝炎（1 例）、デング熱(1 例)、レジオネラ症（6 例）、レプトスピラ症(1 例)の 4 疾患 9 例の報告があった。

《五類感染症》

五類感染症 16 疾患のうち、アメーバ赤痢(2 例)、ウイルス性肝炎（E 型肝炎及び A 型肝炎を除く）(1 例)、急性脳炎（ウエストナイル脳炎、西部馬脳炎、ダニ媒介脳炎、東部ウマ脳炎、日本脳炎、ベネズエラウマ脳炎及びリフトバレー熱を除く）(2 例)、クロイツフェルト・ヤコブ病(4 例)、劇症型溶血性レンサ球菌感染症(2 例)、後天性免疫不全症候群(8 例)、梅毒（1 例）、麻しん(3 例)の 8 疾患 23 例の報告があった。

《新型インフルエンザ等感染症》

報告はなかった。

2 定点把握対象感染症

山梨県および全国における平成 23 年の疾患別報告数と定点当たり報告数を参考資料 3 に示した。本県で患者報告数が多かった疾病は、インフルエンザ (10,344 例)、感染性胃腸炎 (6,392 例)、手足口病 (1,774 例)、A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎 (1,443 例)、流行性耳下腺炎 (1,047 例)、水痘 (1,036 例) であった。定点当たりの報告数が全国より高い疾病は、伝染性紅斑 (山梨県 29.25、全国 27.77)、クラミジア肺炎 (山梨県 2.70、全国 1.43)、薬剤耐性緑膿菌感染症 (山梨県 1.90、全国 1.02) の 3 疾患であった。平成 23 年 2 月に追加された薬剤耐性アシネトバクター感染症は全国で 7 例の報告があったが、本県の報告例はなかった。

平成 22 年と 23 年における定点当たり報告数の比較を参考資料表 4 に示した。定点当たりの報告数が前年より上昇した疾病は、手足口病 (4.73 倍)、咽頭結膜炎 (3.32 倍)、無菌性髄膜炎 (3.00 倍)、インフルエンザ (2.94 倍)、マイコプラズマ肺炎 (2.10 倍)、など 12 疾病であった。

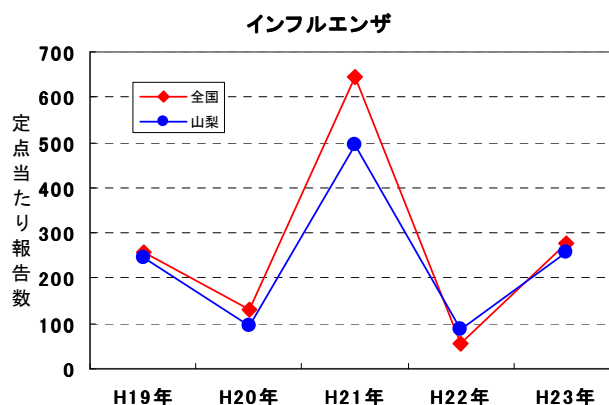
最近 5 年間の定点当たりの報告数の推移を参考資料 5 に示したが、薬剤耐性緑膿菌感染症は全国を上回る報告数である。

(1) インフルエンザ定点から報告された感染症 1

インフルエンザ定点は 40 で、県内全保健所管内にあり週報として報告される。

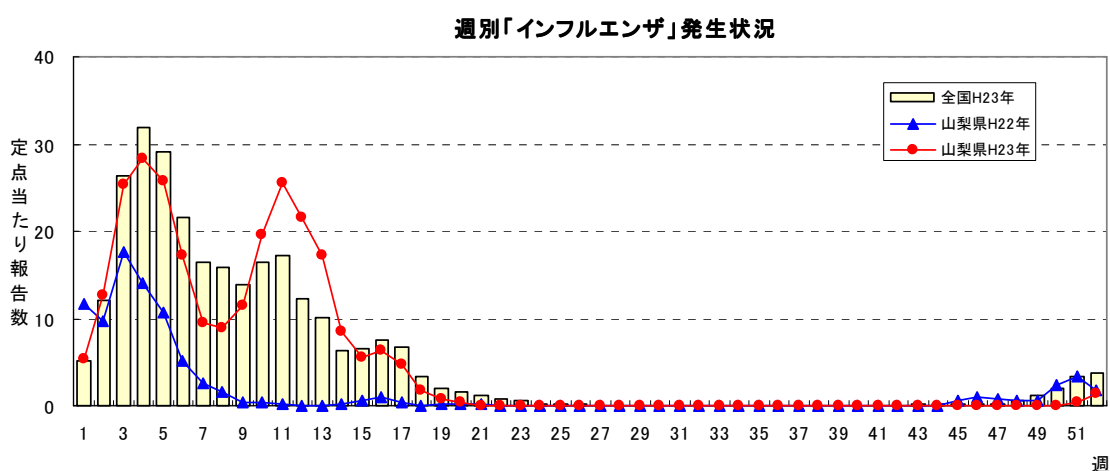
1 インフルエンザ（鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く）

定点医療機関から 10,344 例（定点当たり報告数 258.60）の報告があり、前年（3,518 例）の約 3 倍であった。最近 5 年間の状況は全国とほぼ同様の傾向であった。



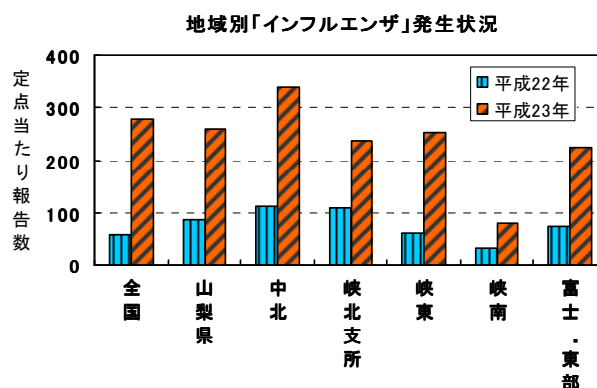
《週別発生状況》

第 4 週に 1 回目の流行ピーク（定点当たり 28.4）がみられ、その後減少が続いたが第 9 週に増加し始め、第 11 週に 2 回目の流行ピーク（定点当たり 25.6）がみられた。全国でも第 11 週に 2 回目のピークがあったが、全国に比べ山梨県の報告数は多かった。第 19 週以降は定点当たりの報告数が 1.0 以下となり、25 週からは 31・40・43・44・45 週に 1～2 例の散発的な報告があったものの 49 週まで報告はなかった。第 50 週から患者報告が始まり 52 週に定点当たりの報告数が 1.38 となり、次の 2011/2012 シーズンの流行が始まった。



《地域別発生状況》

定点当たりの報告数が最も多かったのは中北保健所管内（340.77）で、次いで峡東保健所管内（253.29）であった。最も少なかったのは前年と同じ峡南保健所管内（78.67）だったが、すべての地域で前年より大きく増加した。



(2) 小児科定点から報告された感染症 2～12

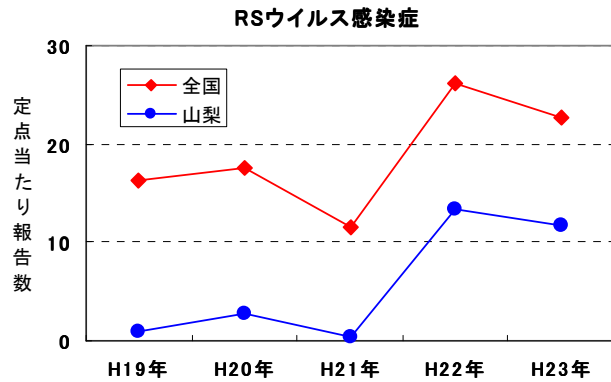
小児科定点は24で、県内全保健所管内にあり週報として報告される。

総報告数は14,297例で、前年（14,095例）よりやや多かった。報告数が多かった疾患は、感染性胃腸炎（6,392例）、手足口病（1,774例）、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎（1,443例）、流行性耳下腺炎（1,047例）、水痘（1,036例）であった。RSウイルス感染症、感染性胃腸炎、百日咳、ヘルパンギーナを除いた7疾病は昨年より報告数が増加した。

2 RSウイルス感染症

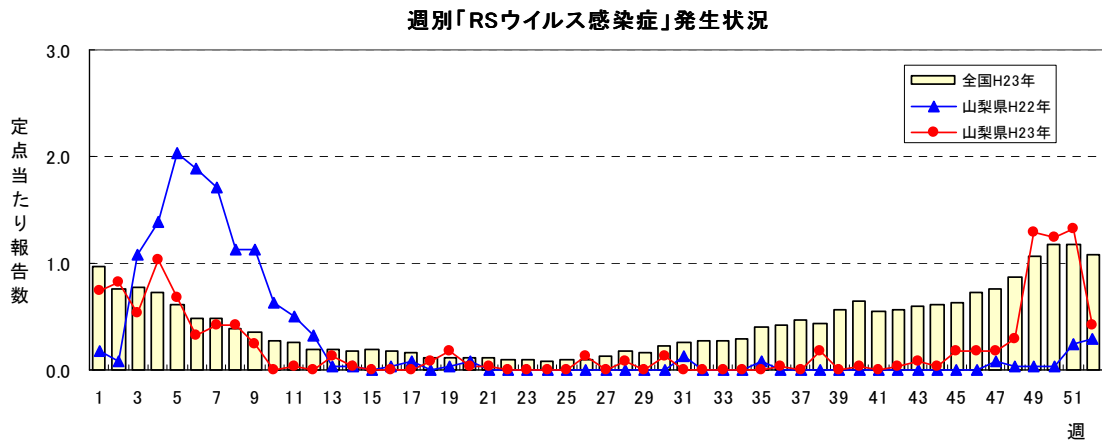
定点医療機関から 279 例（定点当たり報告数 11.63）の報告があり、前年（320 例）よりやや減少した。

最近 5 年間の状況は、全国より少ない状況でほぼ同様に推移している。



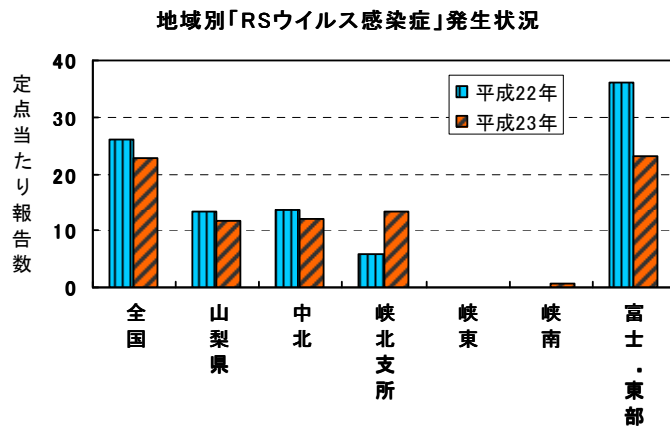
《週別発生状況》

第 4 週にピークがあったが、第 9 週までは全国とほぼ同様の発生状況であった。第 49 週から第 51 週に冬季の流行ピークがみられた。



《地域別発生状況》

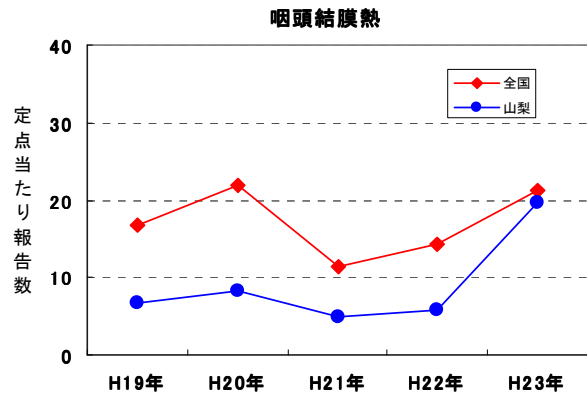
定点当たりの報告数が最も多かったのは富士東部保健所管内（23.20）で、次いで峡北支所管内（13.40）であった。峡東保健所管内からは前年について報告はなかった。



3 咽頭結膜熱

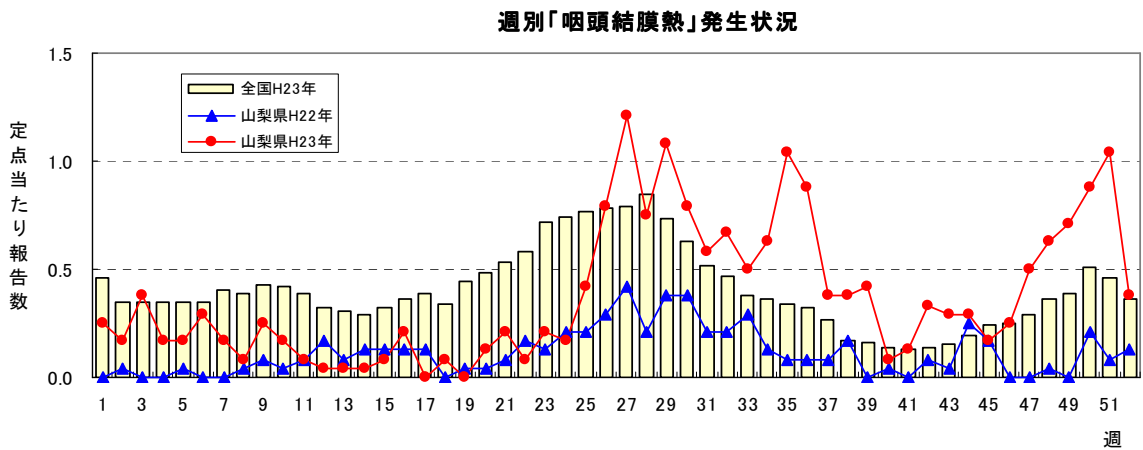
定点医療機関から471例（定点当たり報告数 19.63）の報告があり、前年（142例）に比べ約3倍の増加であった。

最近5年間は、全国より少ない状況でほぼ同様に推移している。



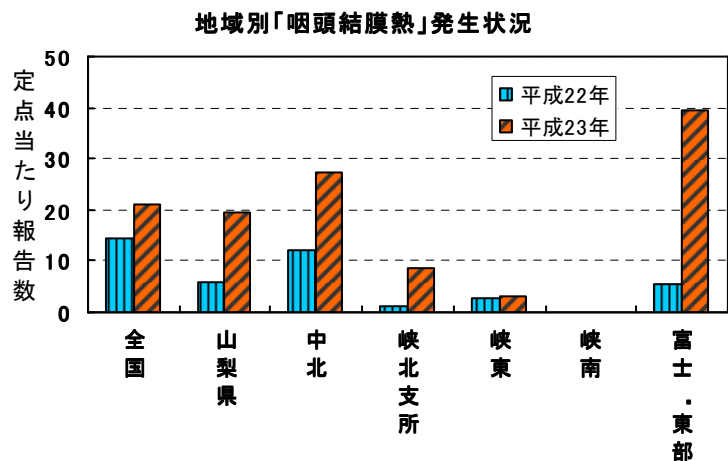
《週別発生状況》

第27・29・35週をピークとした夏季と、第47週から増加して第51週にピークが見られた秋から冬の2回の流行がみられた。



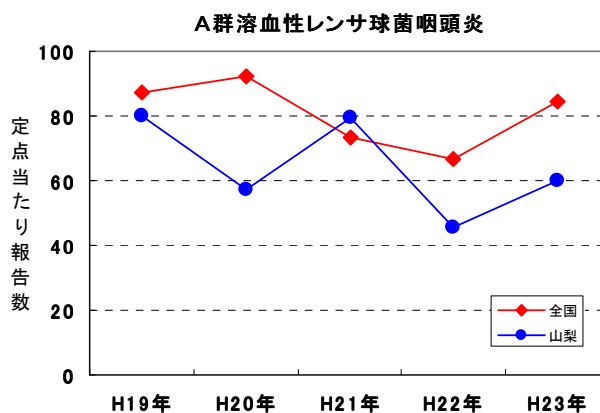
《地域別発生状況》

定点当たりの報告数が最も多かったのは富士東部保健所管内（39.40）で、前年の約7倍だった。峡南保健所管内からの報告は前年に続いてなかったが、報告のあったすべての地域で増加した。



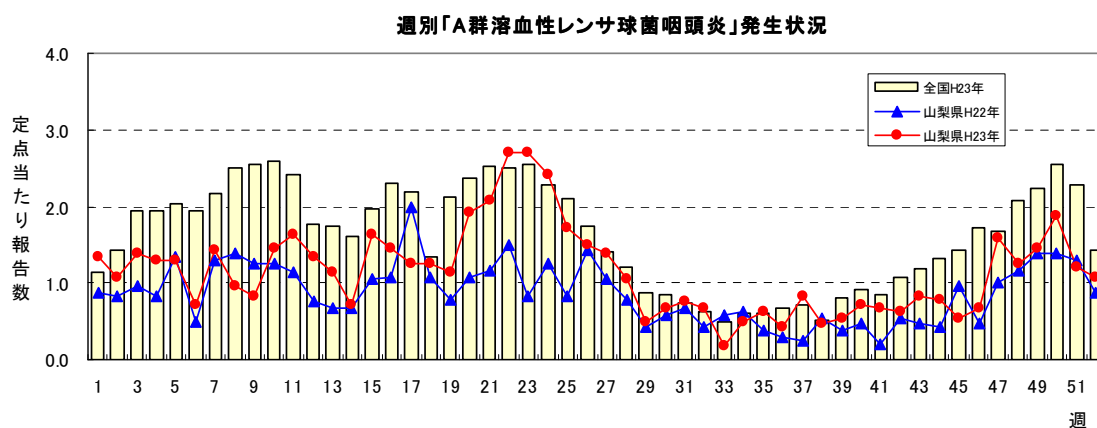
4 A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

定点医療機関から1,443例（定点当たり報告数60.13）の報告があり、前年（1,088例）に比べ1.3倍の増加であった。



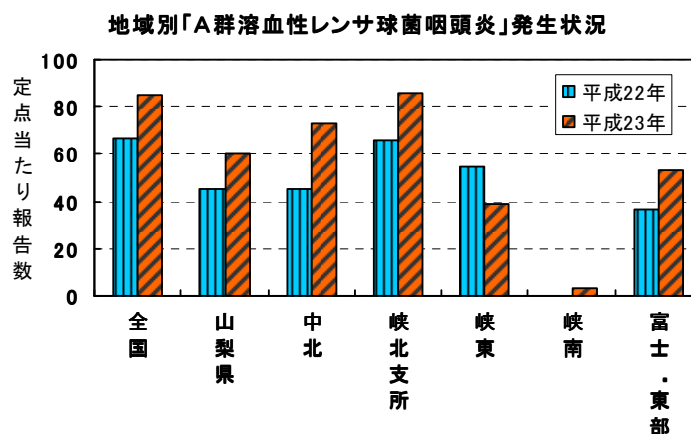
《週別発生状況》

年間を通して報告されているが、第22・23週（定点当たり2.71）をピークとした初夏に流行がみられた。



《地域別発生状況》

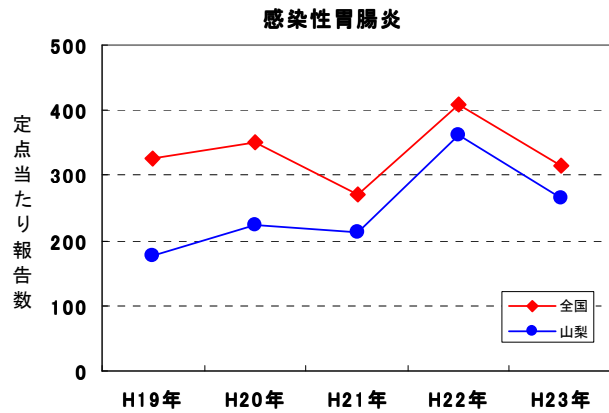
定点当たりの報告数が最も多かったのは峡北支所管内（85.40）で、峡東保健所管内を除く4地域で前年より増加した。



5 感染性胃腸炎

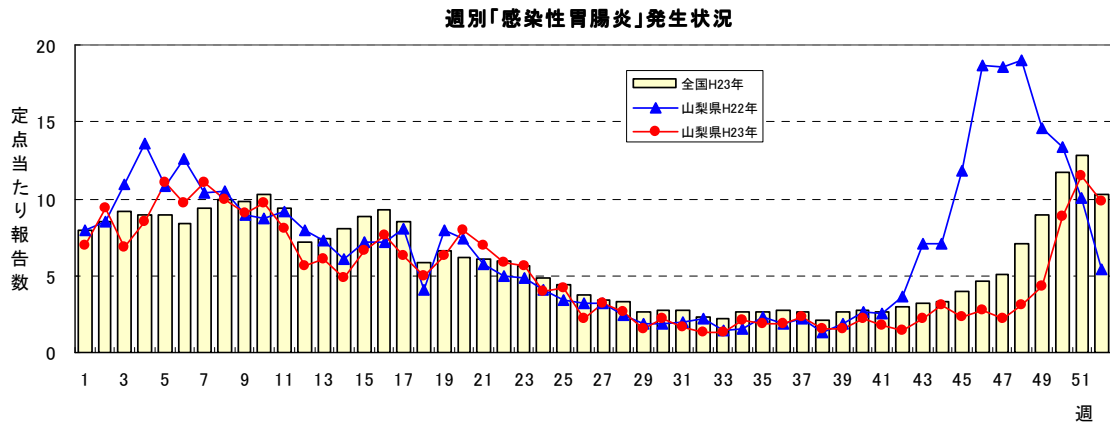
定点医療機関から 6,392 例（定点当たり報告数 266.33）の報告があり、前年（8,707 例）より約 30%少なかった。

最近 5 年間は、全国より少ない状況でほぼ同様に推移している。



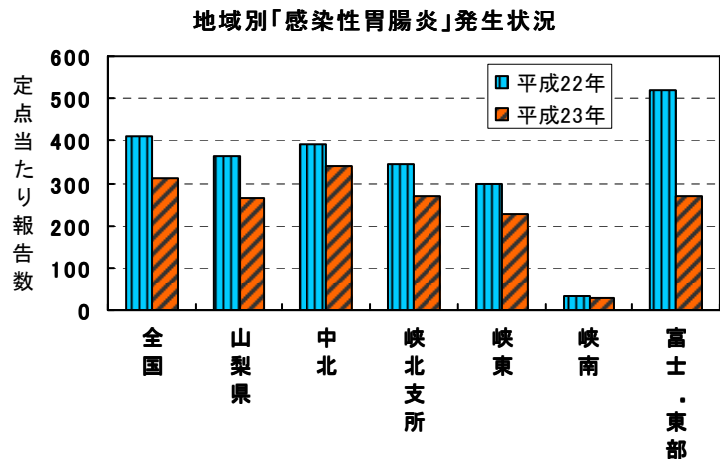
《週別発生状況》

第 5～7 週と第 51 週にピークがみられたが、年間を通してほぼ全国と同様の発生状況を示した。



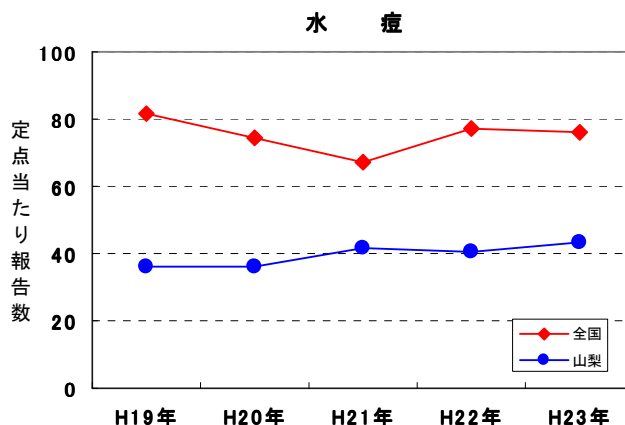
《地域別発生状況》

定点あたりの報告数が最も多かったのは中北保健所管内（341.63）で、すべての地域で前年より減少した。



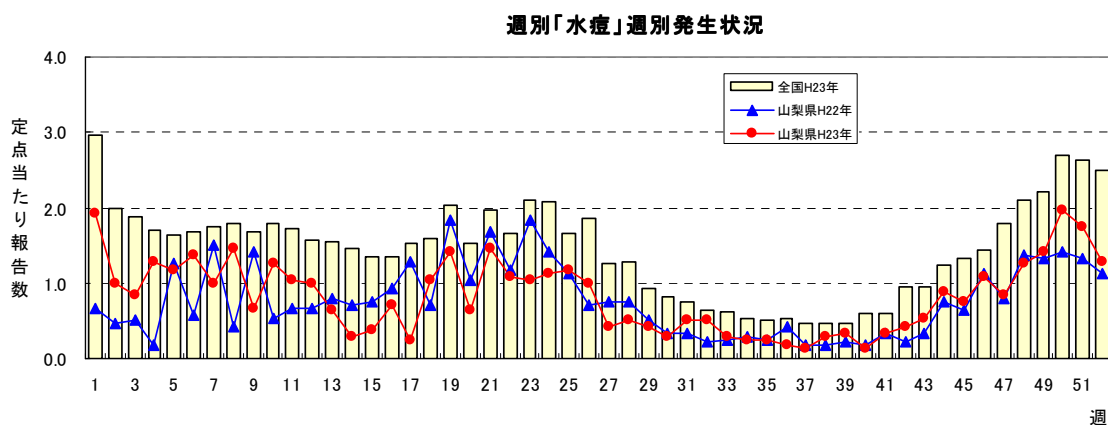
6 水痘

定点医療機関から 1,036 例（定点当たり報告数 43.17）の報告があり、前年（968 例）よりやや多かったものの、最近 5 年間の状況は横ばいである。



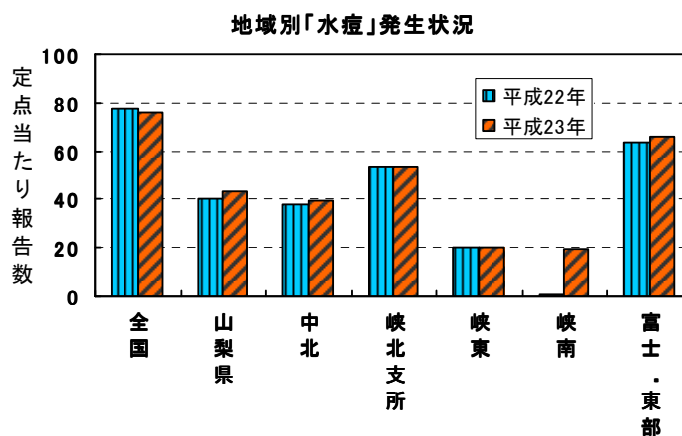
《週別発生状況》

最多報告は第 50 週（定点当たり 1.96）で、年間を通して全国と同様の発生状況を示した。



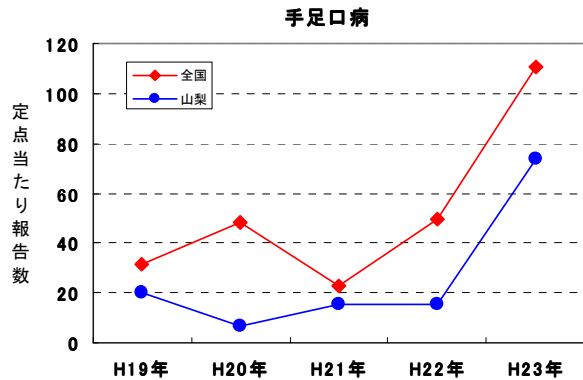
《地域別発生状況》

定点当たりの報告数が最も多かったのは富士東部保健所管内（65.60）で、全ての地域で前年よりやや多い報告であった。



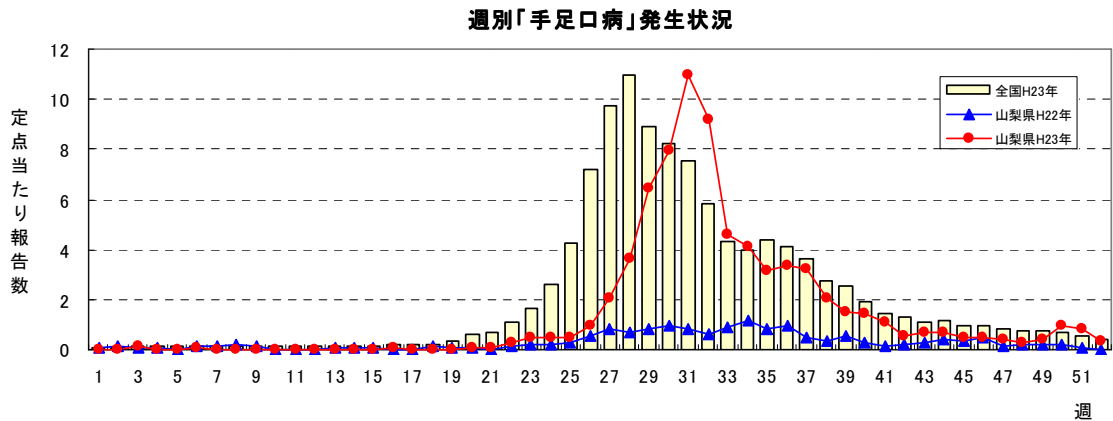
7 手足口病

定点医療機関から1,774例（定点当たり報告数73.92）の報告があり、前年（375例）の5倍近い増加で、全国と同様に最近の5年間で最も多かった。



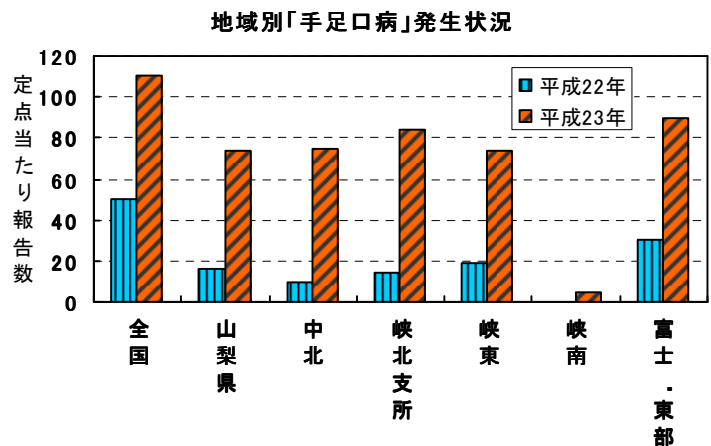
《週別発生状況》

第27週に増加し始め、第31週を中心とした流行のピークがみられた。全国より3週ほど遅い流行だったが、第33週以降は全国と同様の発生状況であった。



《地域別発生状況》

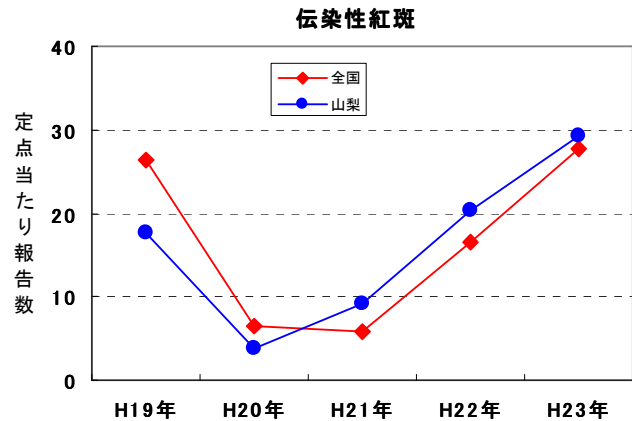
定点当たりの報告数が最も多かったのは富士東部保健所管内（90.20）で、前年の3倍の増加だった。すべての地域で増加した。



8 伝染性紅斑

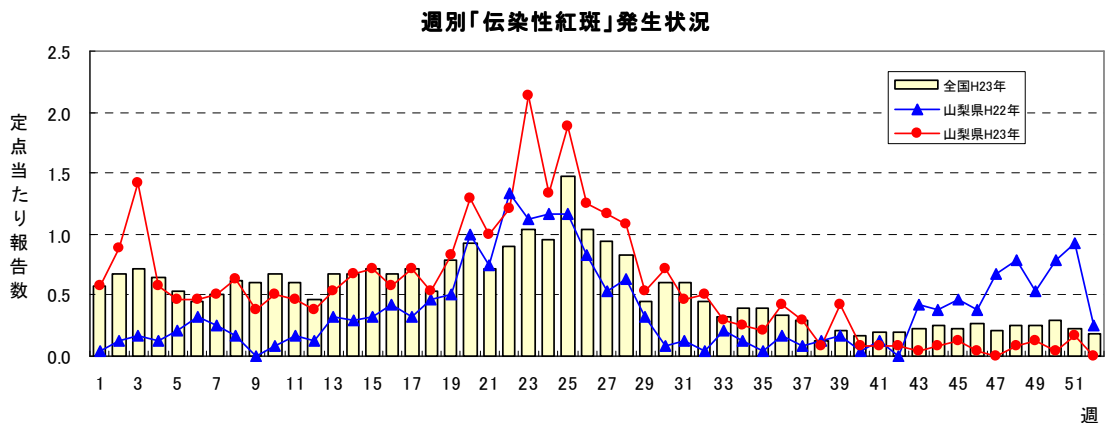
定点医療機関から 702 例（定点当たり報告数 29.25）の報告があり、前年（486 例）の 1.4 倍であった。

最近 5 年間の状況を見ると、H21 年から増加に転じ、定点当たりの報告数は昨年に続いて全国を上回っている。



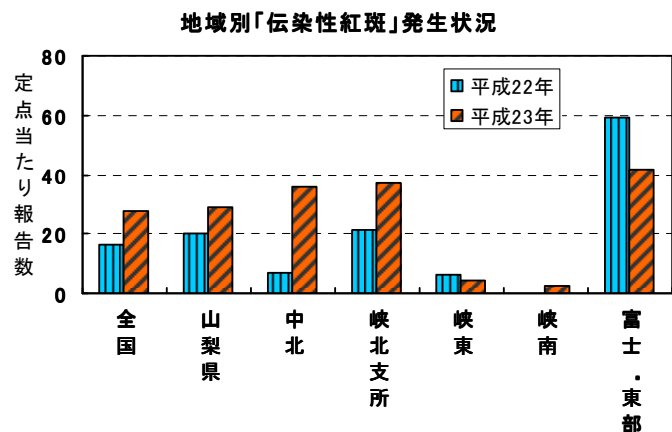
《週別発生状況》

第 3 週に 1 回目のピーク（定点当たり 1.42）が見られ、その後全国と同様の状況を示したが、第 23 週の 2 回目のピーク（定点当たり 2.13）を中心に第 19 週から 30 週にかけて全国を上回る流行状況であった。



《地域別発生状況》

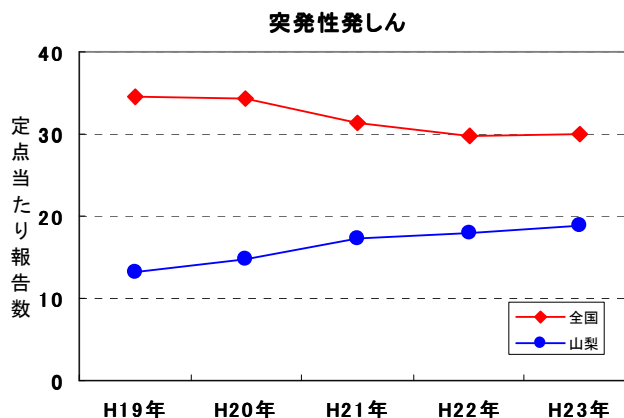
定点当たりの報告数をもっとも多かった富士東部保健所管内（41.60）は前年の 70%だったが、中北保健所管内（35.75）および峡北支所管内（37.20）では前年より増加した。



9 突発性発しん

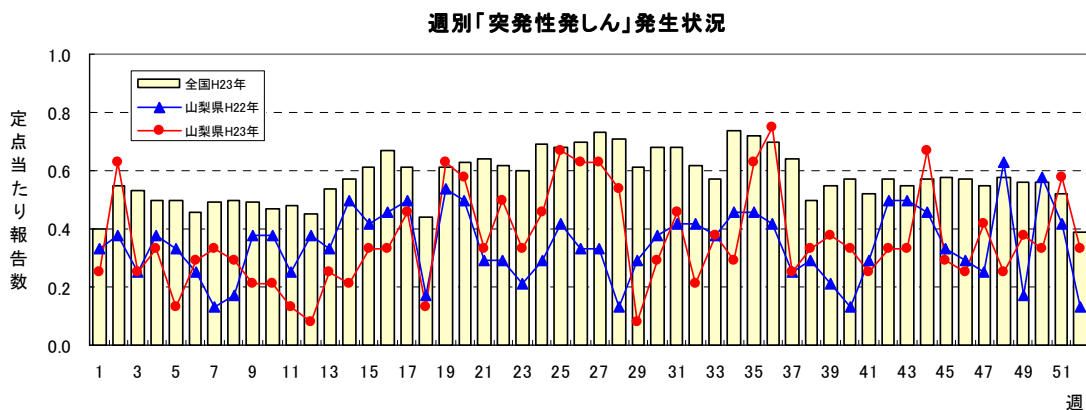
定点医療機関から 454 例（定点当たり報告数 18.92）の報告があり、前年（430 例）よりやや多かった。

最近 5 年間の状況をみると、全国では緩やかな減少傾向だが、本県では緩やかな増加がみられる。



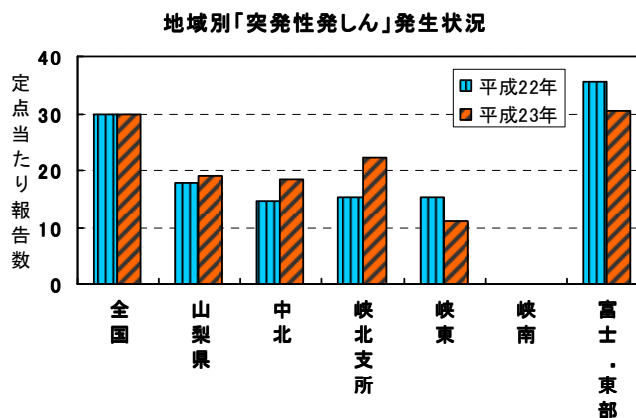
《週別発生状況》

年間を通して報告がある。最多報告は第 36 週であった。



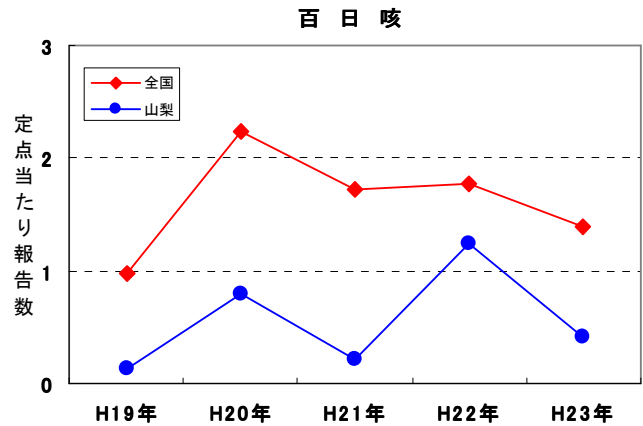
《地域別発生状況》

定点当たりの報告数が最も多かったのは富士東部保健所管内（30.40）だった。前年に続いて、峡南保健所管内からの報告はなかった。



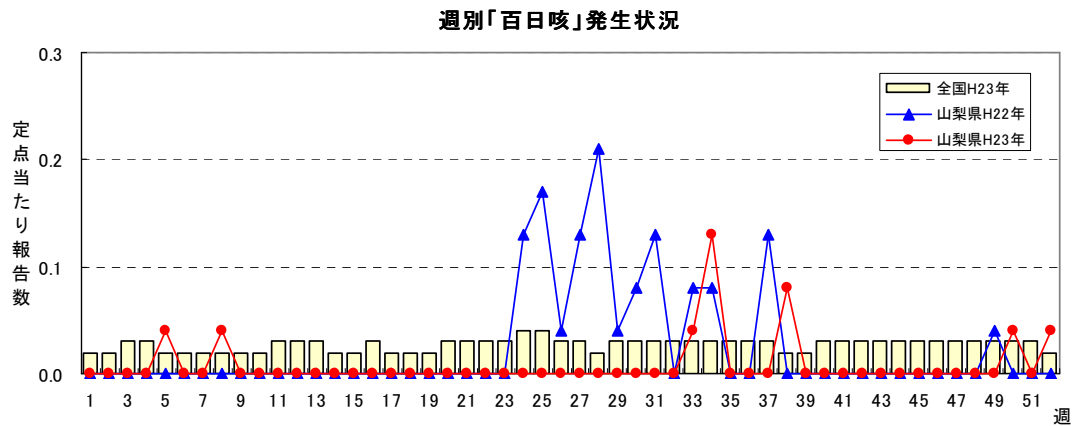
10 百日咳

定点医療機関から10例（定点当たり報告数0.42）の報告があり、前年（30例）の3/1であった。



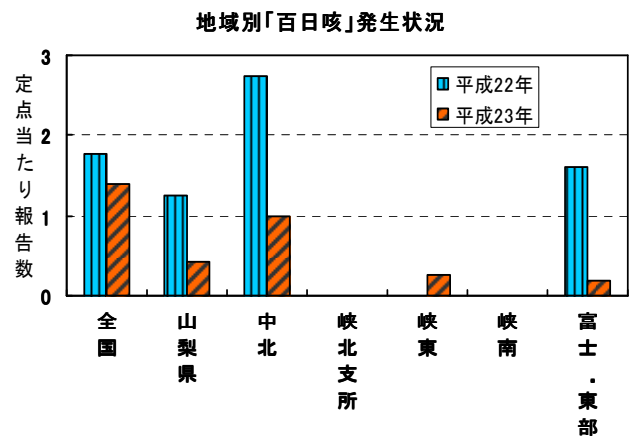
《週別発生状況》

年間を通じて散発的な報告がみられた。



《地域別発生状況》

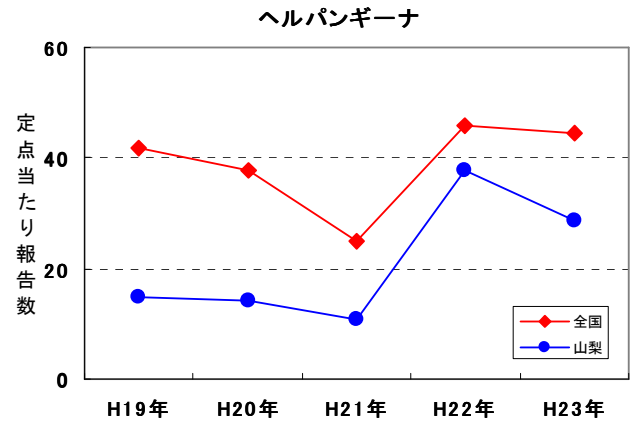
峡北支所、峡南保健所管内からの報告はなかった。報告があった中北保健所、富士東部保健所管内の定点当たりの報告数は1.00、0.20と減少し、前年報告のなかった峡東保健所管内は0.25であった。



1.1 ヘルパンギーナ

定点医療機関から 689 例（定点当たり報告数 28.71）の報告があり、前年（906 例）と比べて約 20%の減少であった。

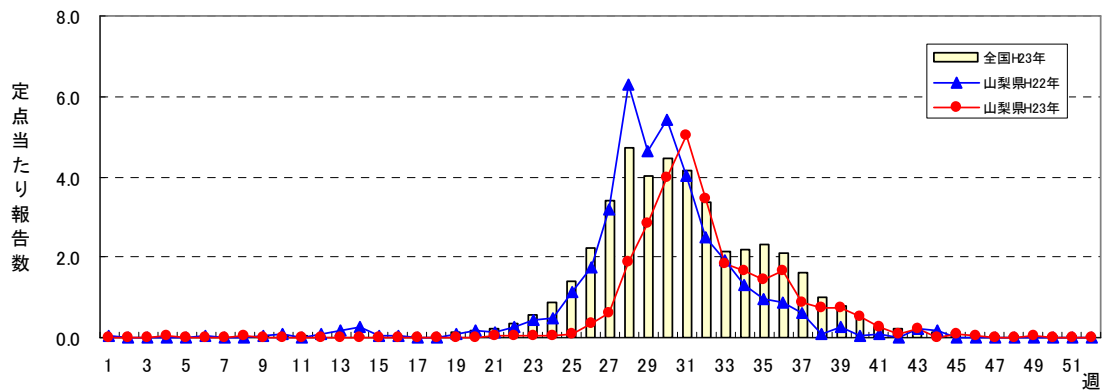
最近 5 年間をみると、全国の状況とほぼ同様の動向がみられる。



《週別発生状況》

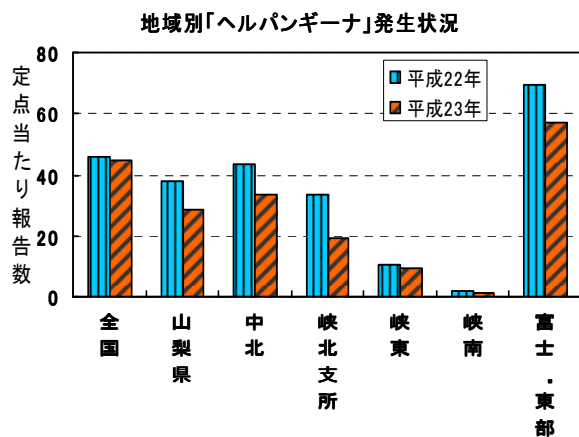
第 28 週から報告数が増加し始め、第 31 週に流行のピークがみられた。全国より 3 週ほど遅いピークだったが、第 33 週以降は全国と同様の状況を示した。

週別「ヘルパンギーナ」発生状況



《地域別発生状況》

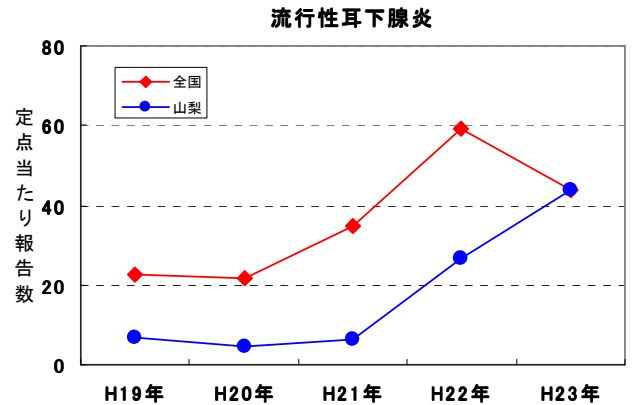
定点当たりの報告数が最も多かったのは富士東部保健所管内（56.80）だったが、すべての地域で前年より減少した。



1.2 流行性耳下腺炎

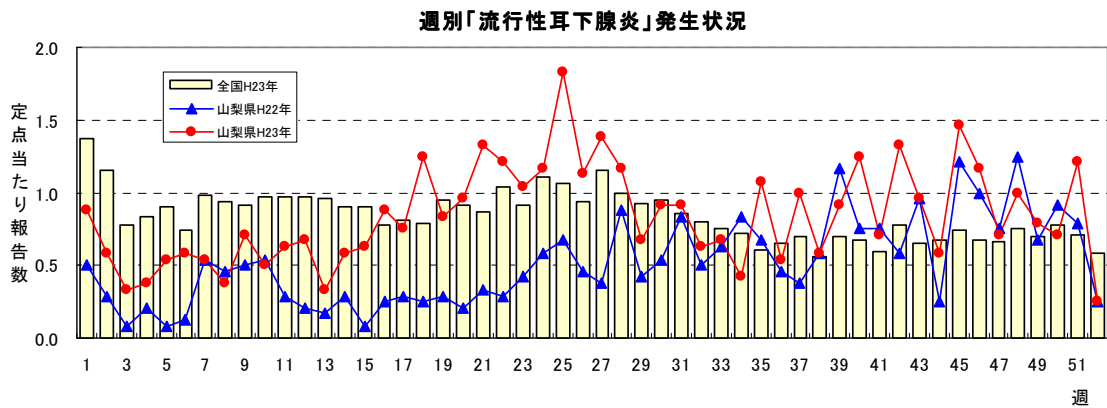
定点医療機関から1,047例（定点当たり報告数43.63）の報告があり、前年（643例）と比べて1.6倍の増加であった。

最近5年間の状況を見ると、H22年までは、全国とほぼ同様の傾向がみられたが、H23年に全国では減少に転じたが本県では増加が続いている。



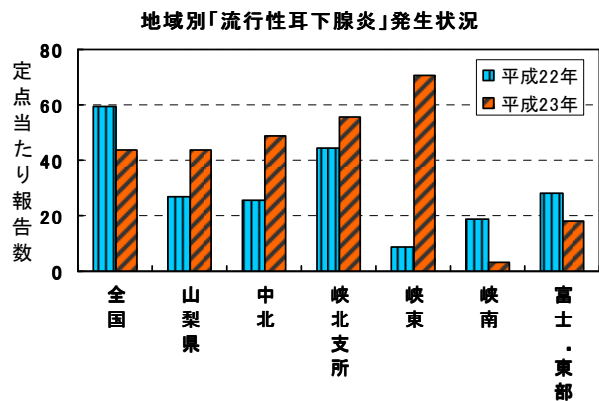
《週別発生状況》

年間を通して報告がみられたが、18～28週および35～51週は全国を上回る報告数であった。最多報告は第25週（定点当たり1.83）であった。



《地域別発生状況》

定点当たりの報告数が最も多かったのは峡東保健所管内（70.50）で、前年に比べ8倍の報告数だった。中北保健所、峡北支所管内も定点当たり40.00以上と前年より増加した。



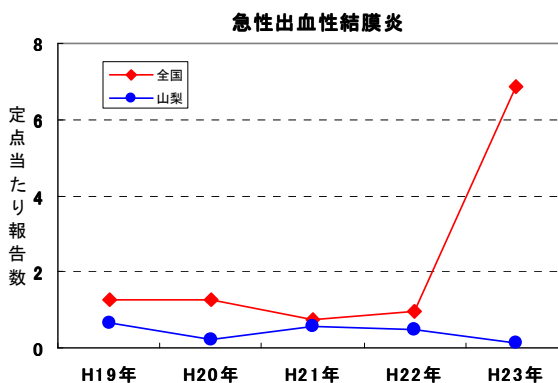
(3) 眼科定点から報告された感染症 13～14

眼科定点は、峡南保健所を除く 4 保健所管内に 9 定点あり、週報として報告される。

平成 23 年に報告された総数は 139 例で、急性出血性結膜炎 1 例および流行性角結膜炎 138 例であった。

1.3 急性出血性結膜炎

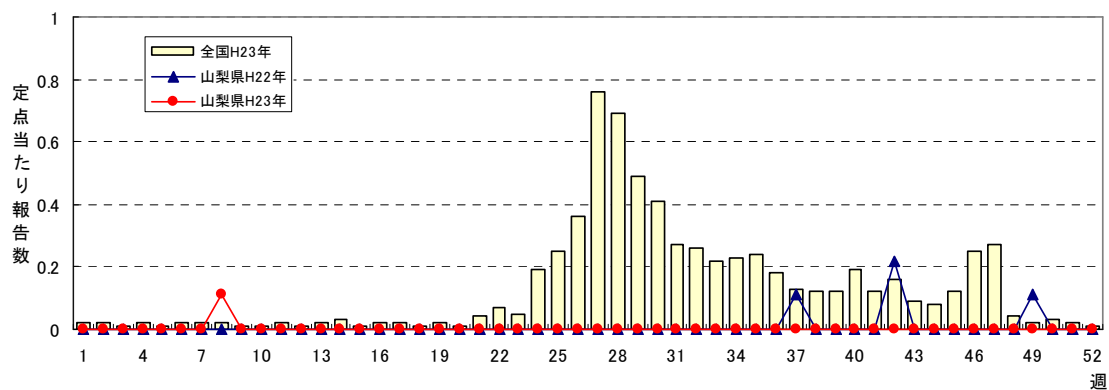
最近 5 年の状況を見ると全国では H23 年に激増したが、県内では定点医療機関から 1 例（定点当たり報告数 0.11）の報告があったのみで減少傾向である。



《週別発生状況》

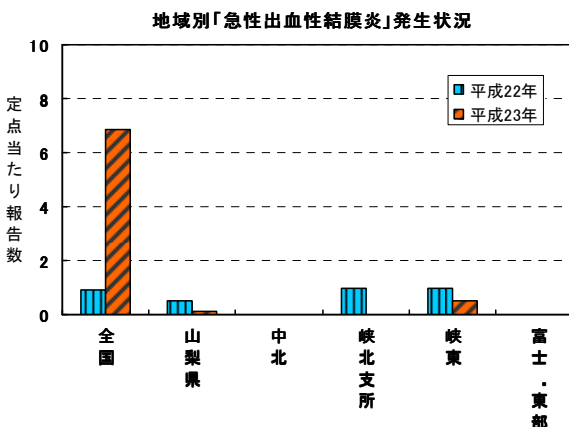
第 8 週に 1 例の報告があったのみである。

週別「急性出血性結膜炎」発生状況



《地域別発生状況》

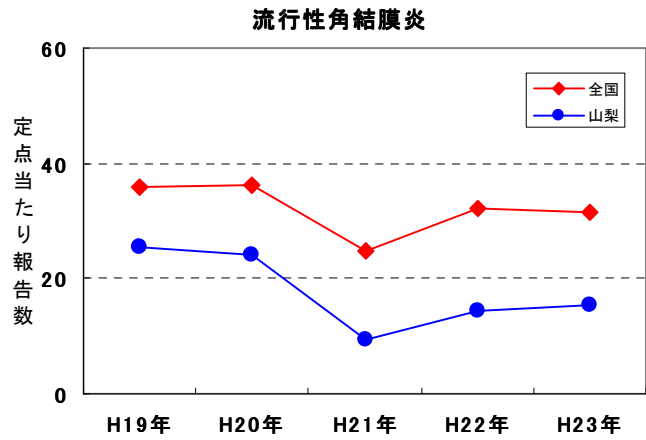
報告があった 1 例は峡東保健所管内からであった。



1.4 流行性角結膜炎

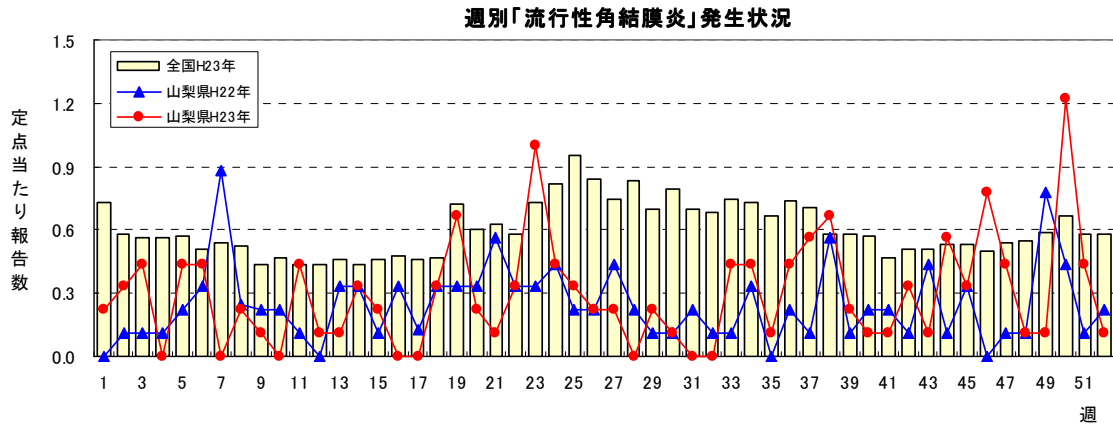
定点医療機関から138例（定点当たり報告数 15.33）の報告があり、前年よりやや増加した。

最近5年間をみると、H22年に増加に転じ、微増傾向にある。全国の場合と、ほぼ同様の動向がみられる。



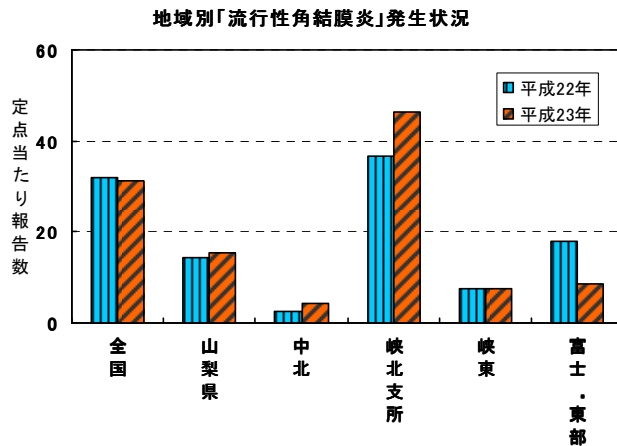
《週別発生状況》

年間を通して報告があり、最多報告は第50週であった。



《地域別発生状況》

定点当たりの報告数が最も多かったのは昨年に続いて、峡北支所管内（46.50）で、定点医療機関がある全ての地域から報告されている。



(4) 性感染症定点から報告された感染症 15～18

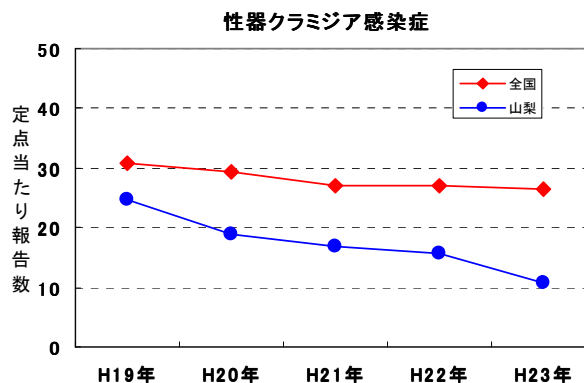
性感染症定点は、峡南保健所を除く4保健所管内に9定点あり月報として報告される。

平成23年に報告された総数は205例(昨年270例)、定点当たりの報告数は22.78で前年の約80%であった。

1.5 性器クラミジア感染症

定点医療機関から98例(定点当たり報告数10.89)の報告があり、前年より44例少なかった。

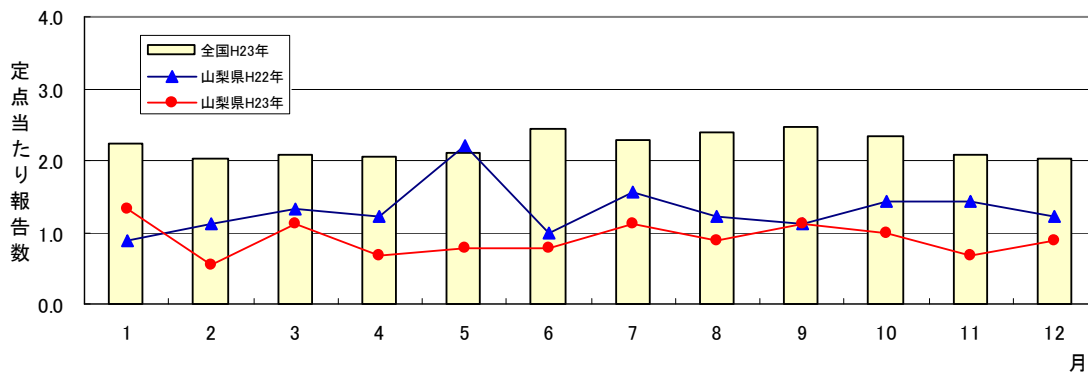
最近5年間の状況は全国、県内ともに減少傾向が続いている。



《月別報告数》

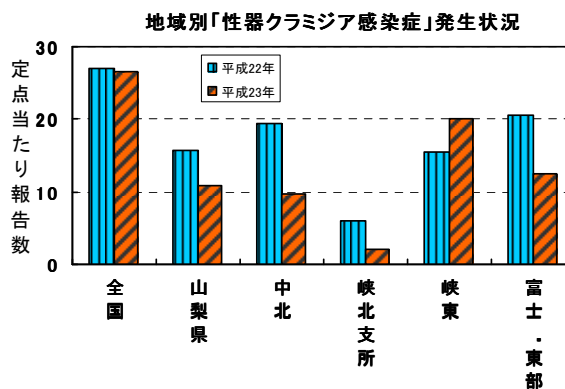
全国より少ない状況で、毎月報告があった。

月別「性器クラミジア感染症」発生状況



《域別発生状況》

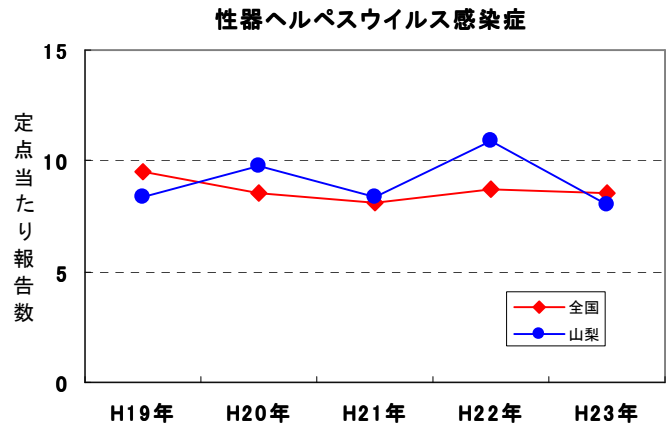
定点当たりの報告数が最も多かったのは峡東保健所管内(20.00)だった。



1.6 性器ヘルペスウイルス感染症

定点医療機関から72例(定点当たり報告数8.00)の報告があり、前年より16例少なかった。

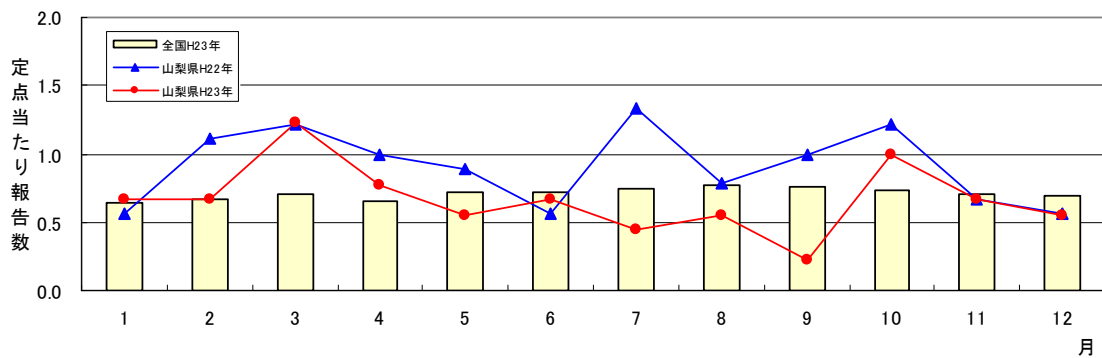
最近5年間は増減をくりかえしている状況である。



《月別発生状況》

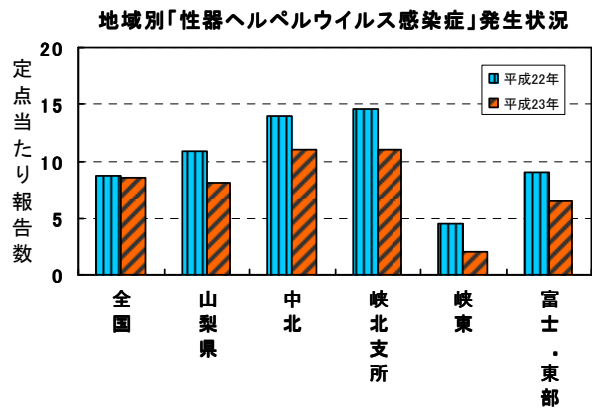
毎月報告があった。

月別「性器ヘルペスウイルス感染症」発生状況



《地域別発生状況》

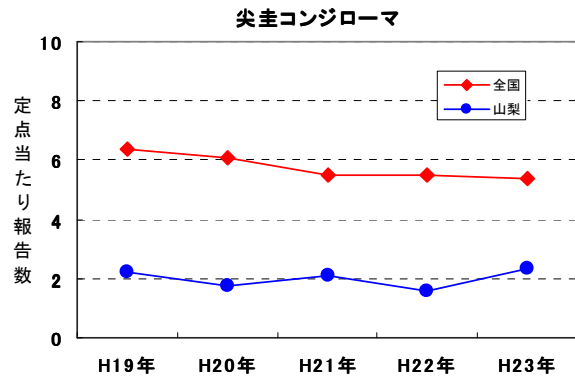
定点当たりの報告数が多かったのは中北保健所、峡北支所管内(11.00)であった。定点医療機関があるすべての地域で前年より減少した。



1.7 尖圭コンジローマ

定点医療機関から 21 例（定点当たり報告数 2.33）の報告があり、前年より 7 例多かった。

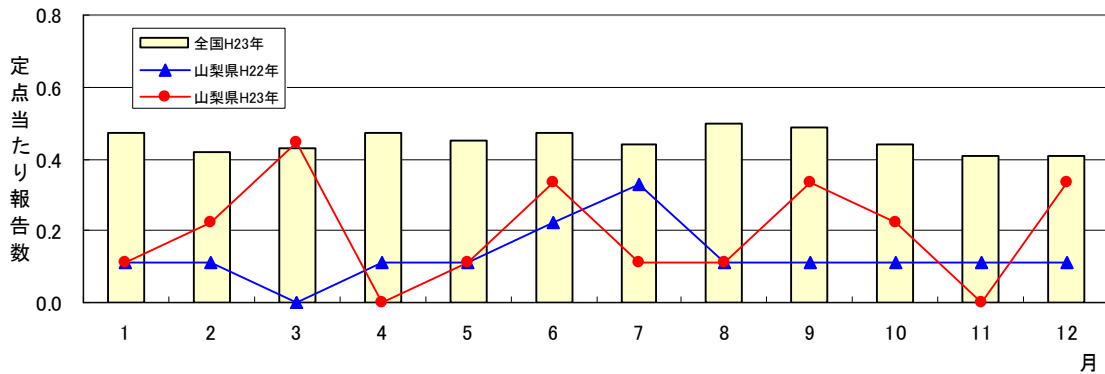
最近 5 年間の状況を見ると、全国では緩やかな減少傾向であるが、本県ではわずかな増減を繰り返し、H23 年にはやや増加した。



《月別発生状況》

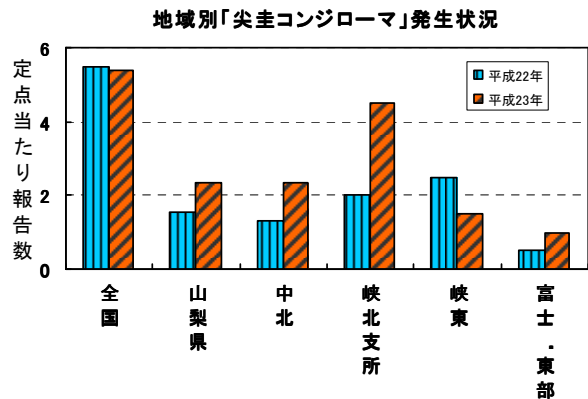
全国より少ない状況で、毎月報告があった。

月別「尖圭コンジローマ」発生状況



《地域別発生状況》

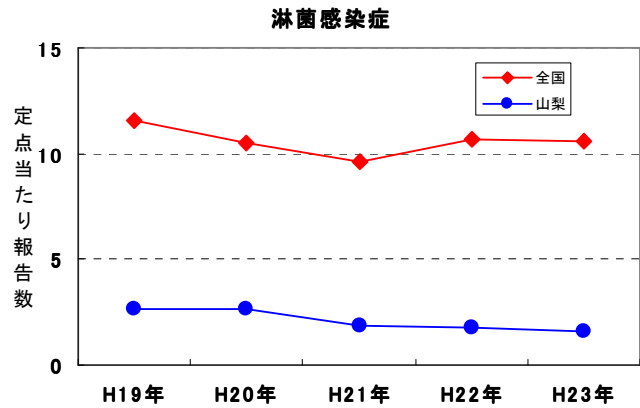
定点当たりの報告数をもっとも多かったのは峡北支所管内（4.50）であったが、峡東保健所管内を除き、前年より増加した。



1.8 淋菌感染症

定点医療機関から14例（定点当たり報告数1.56）の報告があり、前年より2例少なかった。

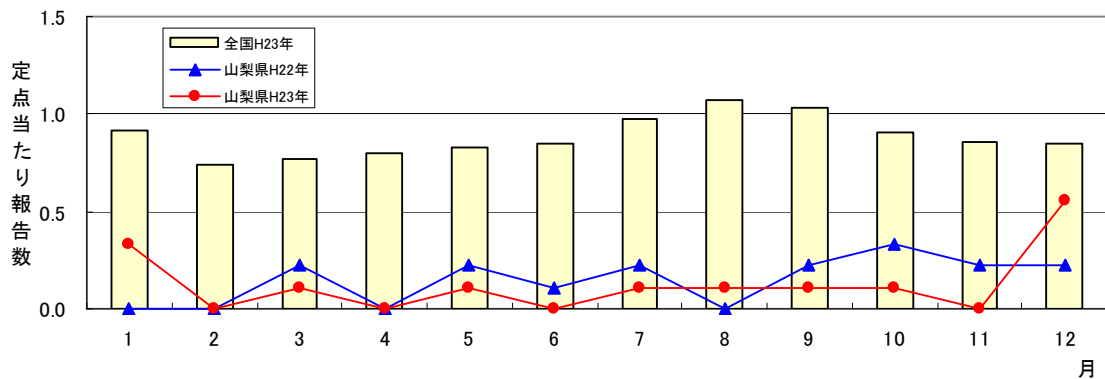
最近5年間は緩やかな減少傾向が続いている。



《月別発生状況》

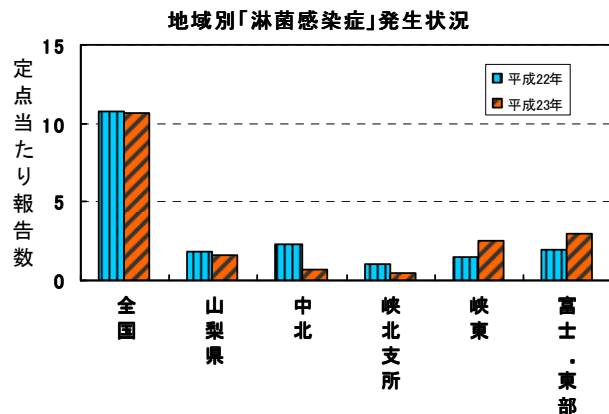
全国より少ない状況で、毎月報告があった。

月別「淋菌感染症」発生状況



《地域別発生状況》

定点当たりの報告数が最も多かったのは富士東部保健所管内（3.00）で、峡東保健所管内とともに前年より増加した。



(5) 基幹定点から報告された感染症 19～25

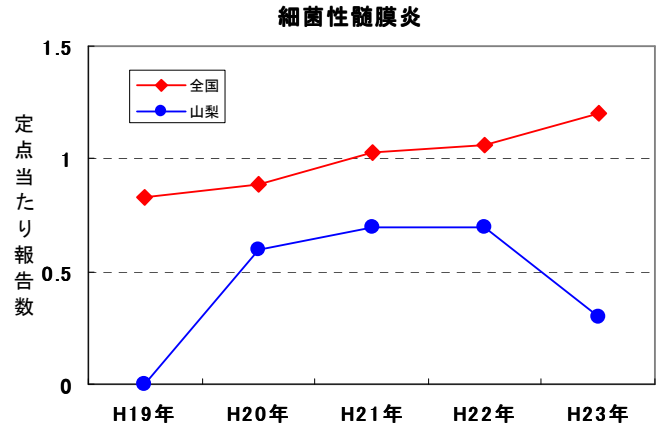
基幹定点は県内全保健所管内にあり 10 定点である。細菌性髄膜炎、無菌性髄膜炎、マイコプラズマ肺炎、クラミジア肺炎（オウム病は除く）は週報として、メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症、ペニシリン耐性肺炎球菌感染症、薬剤耐性緑膿菌感染症、薬剤耐性アシネトバクター感染症は月報として報告される。

報告数が多かったのは、メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症 121 例、マイコプラズマ肺炎 105 例であった。薬剤耐性緑膿菌感染症は 19 例であるが、最近 5 年間の定点当たりの報告数は常に全国平均を上回っている。平成 23 年 2 月に追加された薬剤耐性アシネトバクター感染症は全国で 7 例の報告があったが、本県の報告例はなかった。

1.9 細菌性髄膜炎

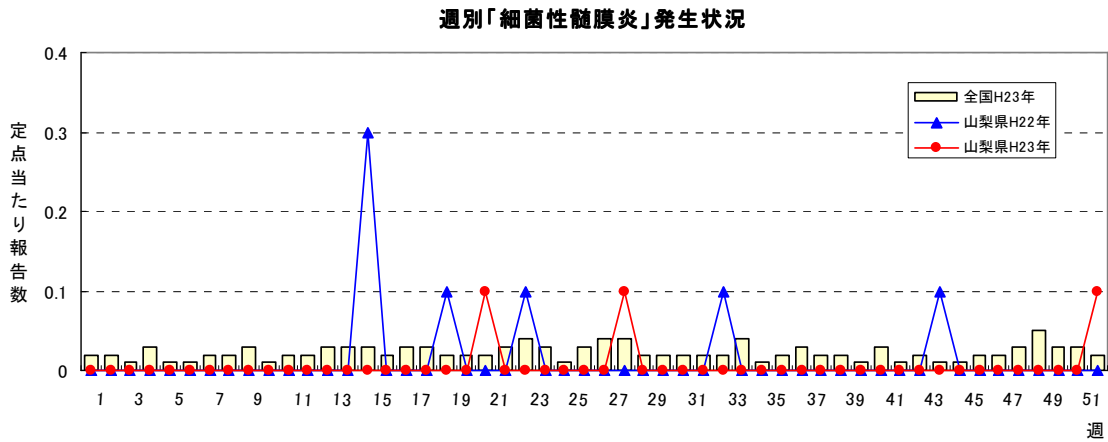
定点医療機関から3例（定点当たり報告数0.30）の報告があった。

最近5年間の状況は全国では増加傾向であるが、本県ではH23年に減少に転じた。



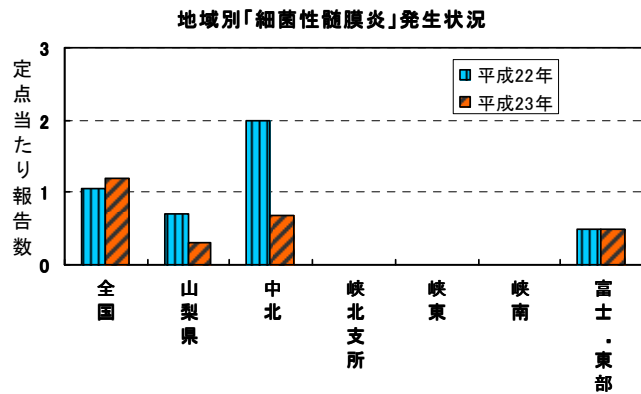
《週別発生状況》

散発的（第21週、28週、52週）な報告があった。



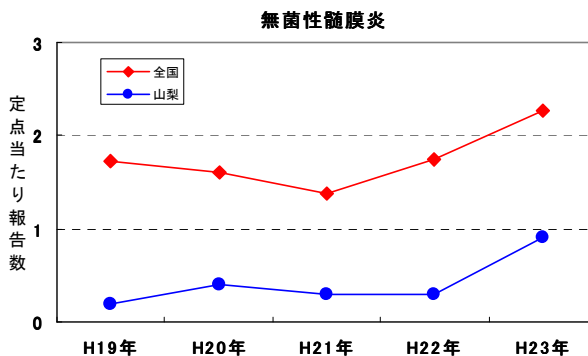
《地域別発生状況》

報告例の3例は中北保健所管内2例（0.67）、富士東部保健所管内1例（0.50）であった。



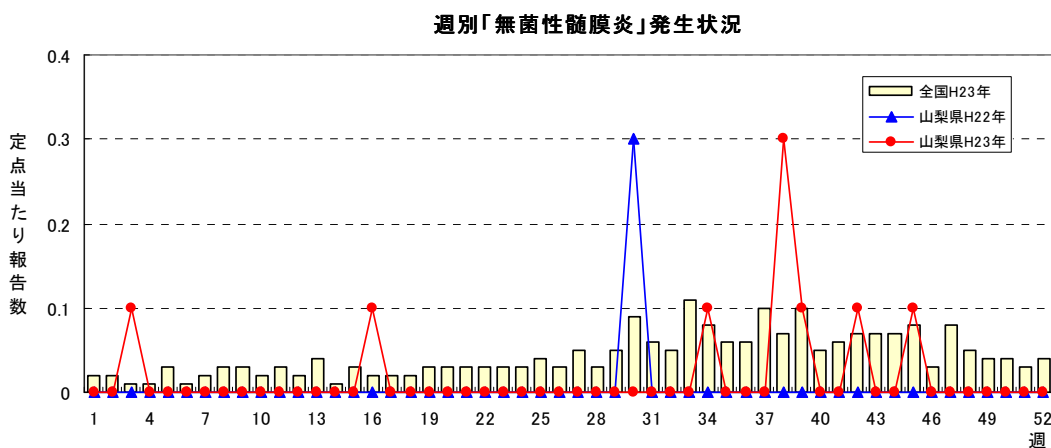
20 無菌性髄膜炎

定点医療機関から9例（定点当たり報告数 0.90）の報告があった。全国と同様傾向を示している。



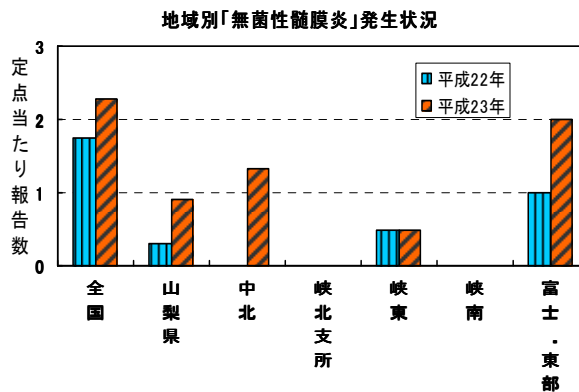
《週別発生状況》

散発的（第3週、16週、34週、38週、39週、42週、45週）な報告があった。



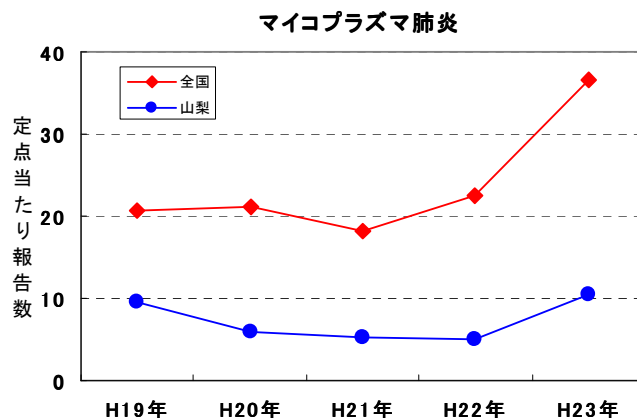
《地域別発生状況》

報告のあった地域は、中北保健所管内4例(1.33)、富士東部保健所管内4例(2.00)、峡東保健所管内1例(0.50)だった。



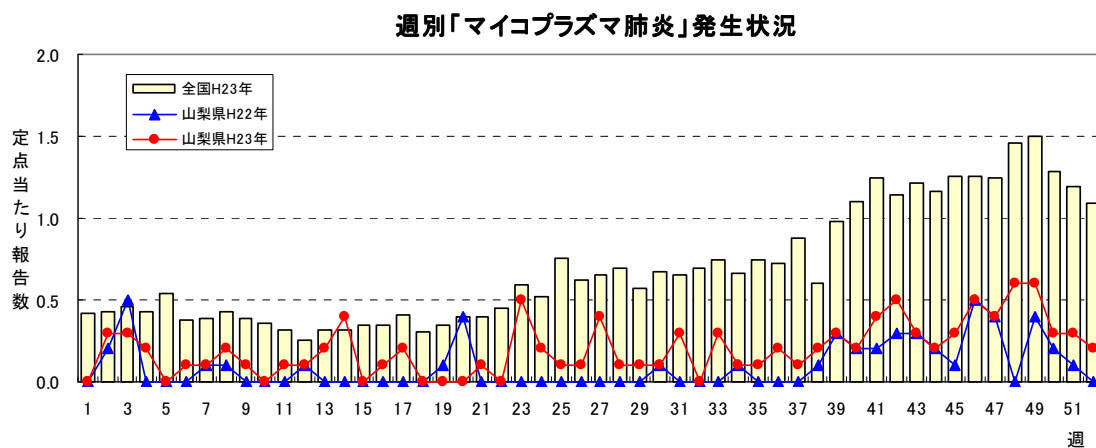
2.1 マイコプラズマ肺炎

定点医療機関から 105 例（定点当たり報告数 10.50）の報告があり、H19 年以降最多報告数であった。全国との状況と同じ動向を示している。



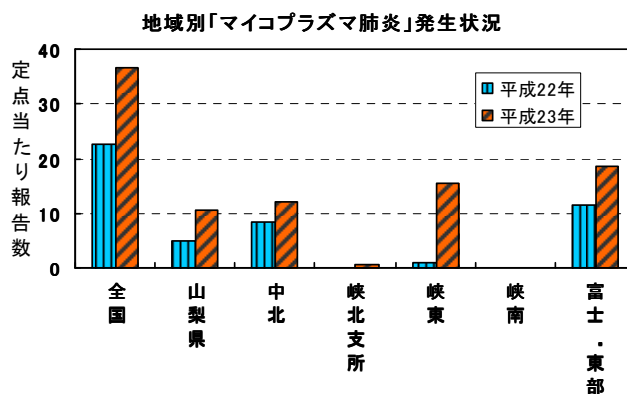
《週別発生状況》

大きな流行は見られなかったが、年間を通して報告があった。



《地域別発生状況》

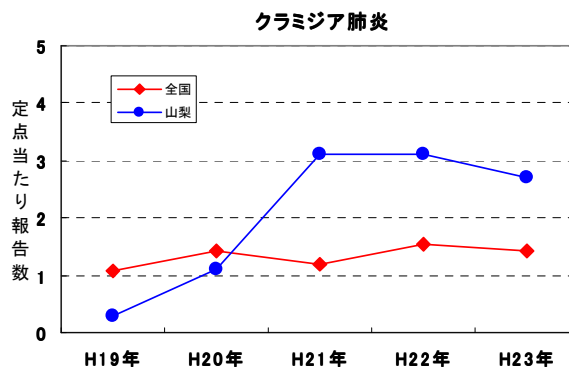
富士東部保健所管内 37 例 (18.50)、中北保健所管内 36 例 (12.00)、峡東保健所管内 31 例 (15.50) と 3 地域からの報告が多かった。



2.2 クラミジア肺炎（オウム病を除く）

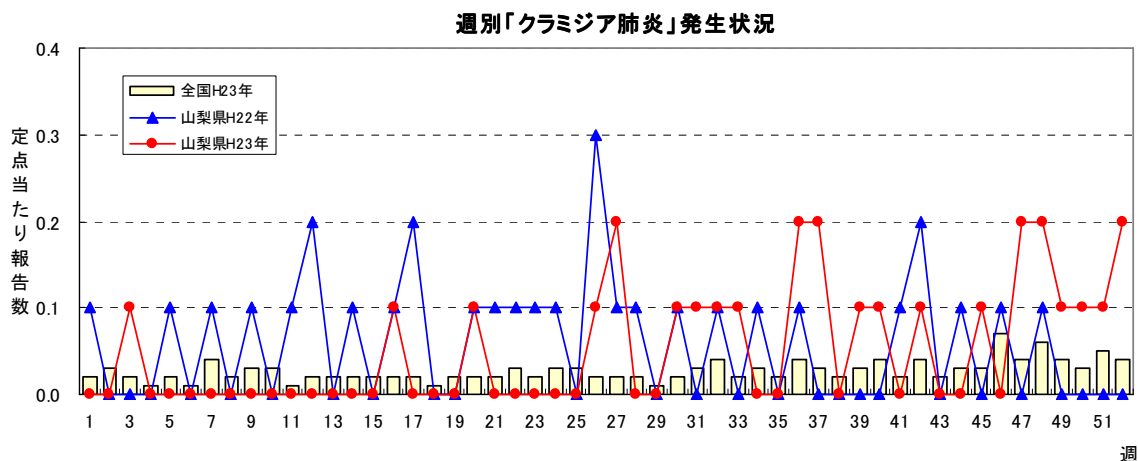
定点医療機関から 27 例（定点当たり報告数 2.70）の報告があった。

最近 5 年間の状況をみると、平成 21 年以降全国を上回っている。



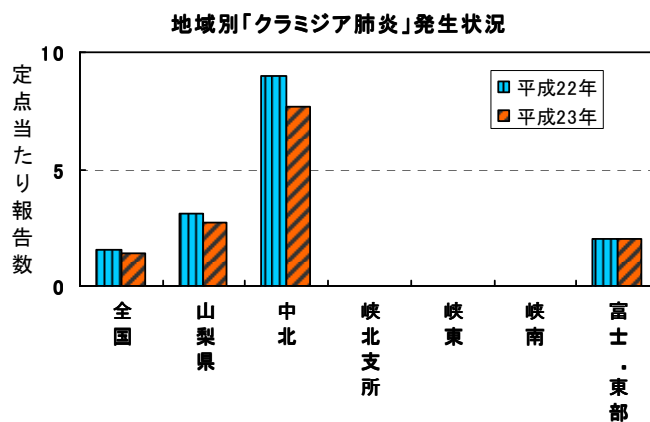
《週別発生状況》

年間を通して報告があった。



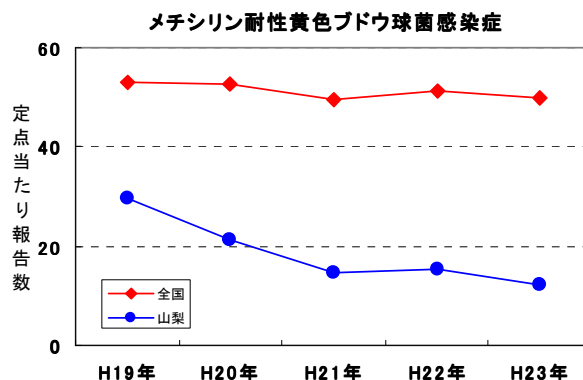
《地域別発生状況》

中北保健所管内 23 例（7.67）、富士東部保健所管内 4 名（2.00）で、他の 3 地域からの報告はなかった。



2.3 メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症

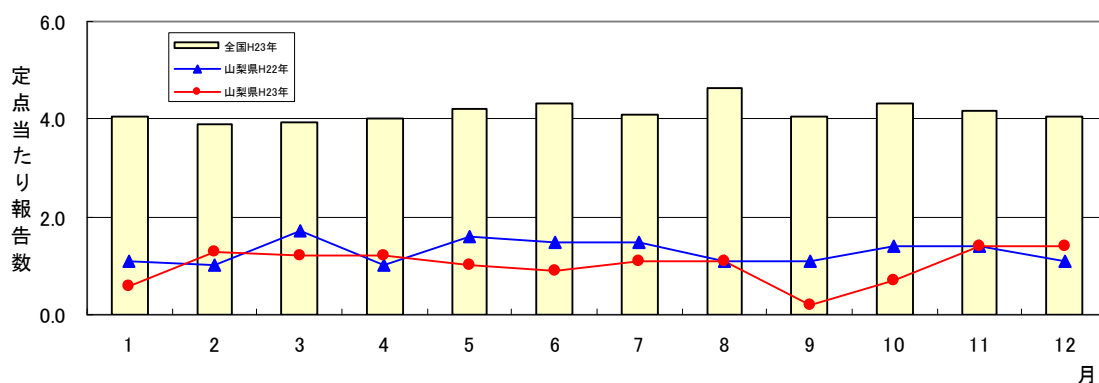
定点医療機関から121例(定点当たり報告数12.10)の報告があり、最近の5年間は減少傾向にある。



《月別発生状況》

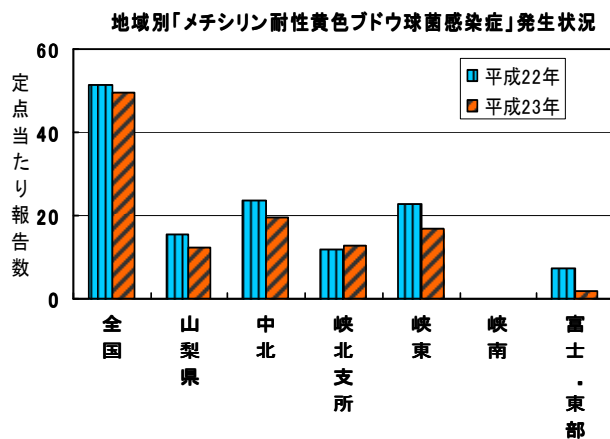
全国より少ない状況ではあるが、毎月報告があった。

月別「メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症」発生状況



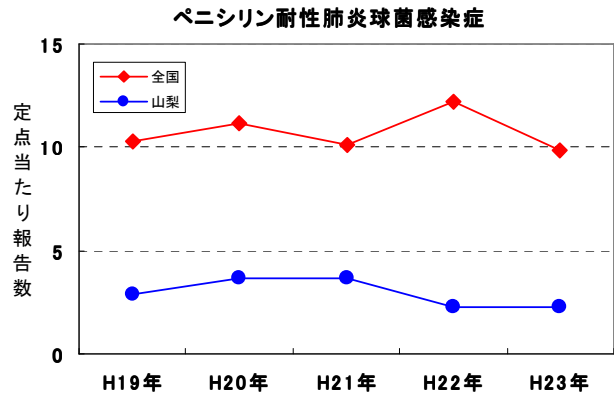
《地域別発生状況》

定点当たりの報告数が最も多かったのは中北保健所管内(19.33)で、峡南保健所管内を除くすべての地域から報告があった。



2.4 ペニシリン耐性肺炎球菌感染症

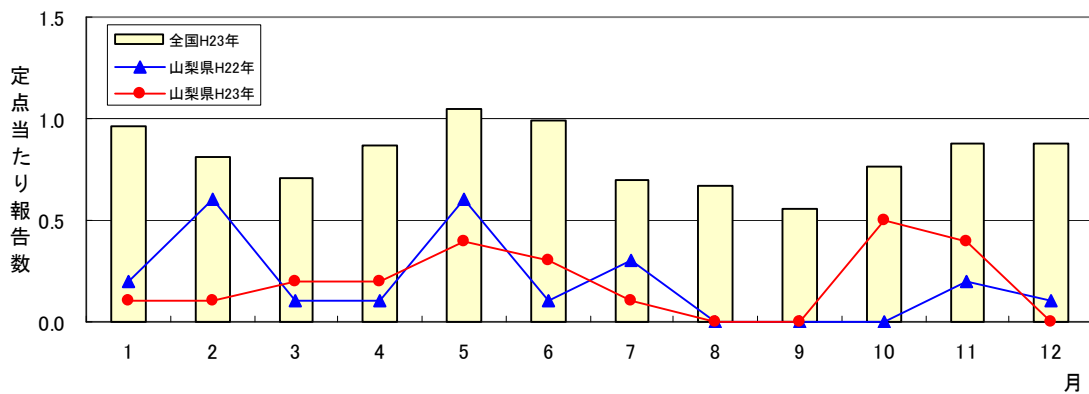
定点医療機関から前年と同じ 23 例
(定点当たり報告数 2.30) の報告があ
った。



《月別発生状況》

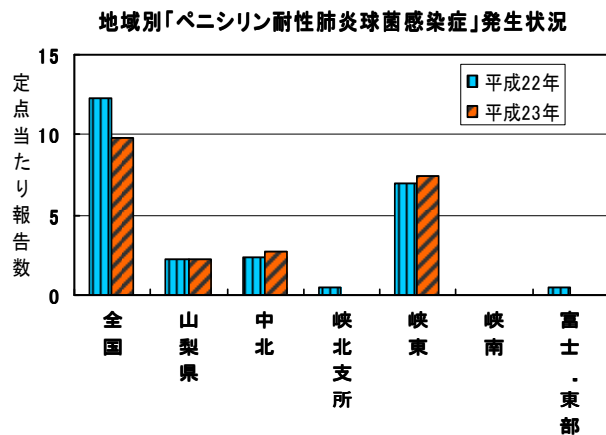
8月、9月、12月を除いて毎月報告があった。

月別「ペニシリン耐性肺炎球菌感染症」発生状況



《地域別発生状況》

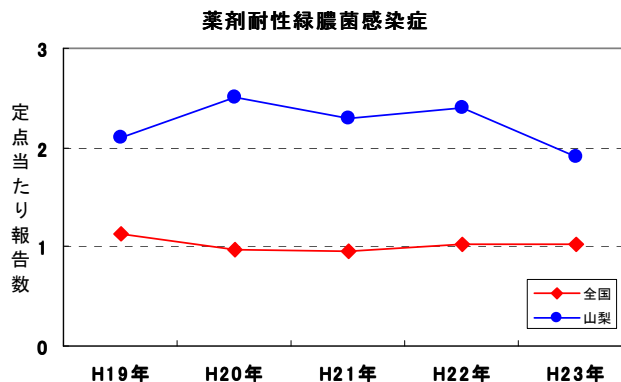
報告があった地域は、中北保健所
(2.67)、峡東保健所管内(7.50)で、
他の3地域からの報告はなかった。



2.5 薬剤耐性緑膿菌感染症

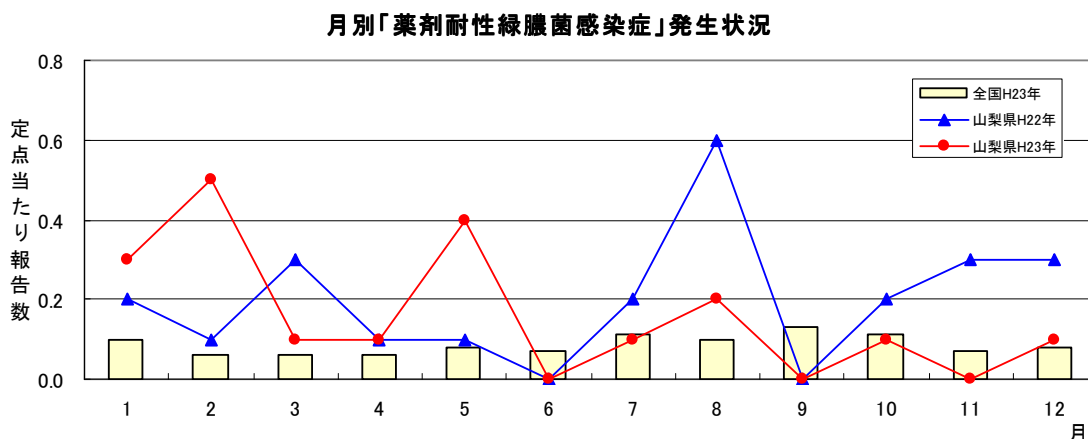
定点医療機関から前年より 5 例少ない、19 例（定点当たり報告数 1.90）の報告があった。

最近 5 年間の定点当たりの報告数は常に全国を上回っている。



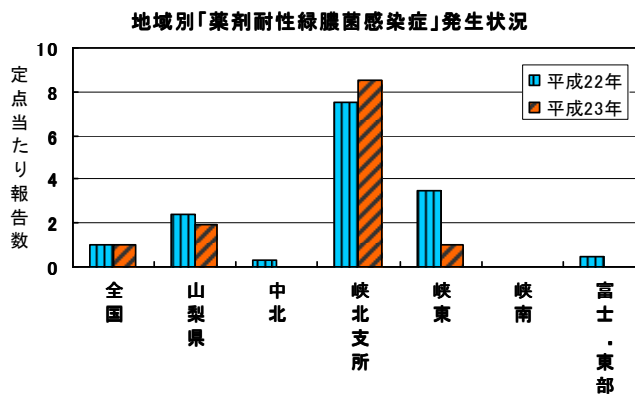
《月別発生状況》

6月、9月、11月を除いて毎月報告があった。



《地域別発生状況》

報告があった地域は、峡北支所（8.50）、峡東保健所管内（1.00）で、他の3地域からの報告はなかった。

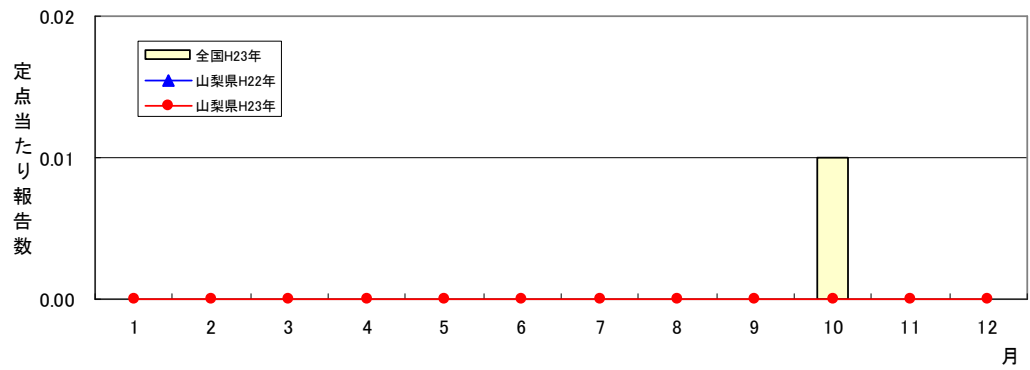


2.6 薬剤耐性アシネトバクター感染症

山梨県内の報告はなかった。

《月別発生状況》

月別「薬剤耐性アシネトバクター感染症」発生状況



《地域別発生状況》

なし

Ⅲ 病原微生物検出情報

1 ウイルス検出状況

県内 19 箇所の病原体定点及び集団発生事例において採取された 1,031 検体について PCR 法と細胞分離法により、697 検体 (67.6%) からウイルスを検出した。

インフルエンザウイルスが 410 件と 58.8% を占め、次いでノロウイルスが 236 件 (33.9%) であった。他に A 群ロタウイルス 36 件 (5.2%)、ヒトヘルペスウイルス 5 件 (0.7%)、アデノウイルス、パラインフルエンザウイルス、麻しんウイルスが 2 件 (各 0.3%)、コクサッキーウイルス、RS ウイルス、ヒトメタニューモウイルス、A 型肝炎ウイルスが 1 件 (各 0.1%) 検出された。

インフルエンザウイルスの型別検出状況は、A(H1)pdm09 が 255 検体 (62.2%)、A(H3) が 79 検体 (19.3%)、及び B 型が 76 検体 (18.5%) であった。患者報告数が多かった 1 回目のピーク時 (1 月～2 月) は A(H1)pdm09 が 77.5%、2 回目のピーク時 (3 月～4 月) は B 型が 68.2% を占めていたことから、これらの型が流行の原因と思われた。

A(H1)pdm09 についてのオセルタミビル耐性株の検出状況は 2010/2011 シーズンについて 118 件を解析したところ耐性株は検出されなかった。2011/2012 シーズンについては 2011 年 12 月末まで A(H1)pdm09 は検出されなかった。

胃腸炎患者 (病原体定点及び集団発生事例) から検出されたウイルスはノロウイルス G II が 215 件、A 群ロタウイルスが 36 件、ノロウイルス G I が 21 件で重複感染も数例見られた。8～10 月を除き年間を通してウイルスが検出された。

平成 23 年 月別ウイルス検出状況

検体数		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
検出ウイルス	A(H1)pdm09	194	54	7										255
	インフルエンザウイルス* A(H3)香港型	26	31	8	13	1								79
	B型	2	13	32	28						1			76
	アデノウイルス 3型										1		1	2
	パラインフルエンザ 1型												1	1
	2型											1		1
	コクサッキーウイルス B1												1	1
	RSウイルス	1												1
	麻しんウイルス* D4型	1												1
	D9型			1										1
	ヒトメタニューモウイルス*				1									1
	ヒトヘルペスウイルス 6型					1	1	1					1	4
	7型								1					1
	ノロウイルス* G I	6				1	8	1				1	4	21
	G II	14	28	40	10	3	21	4				3	92	215
	A群ロタウイルス*		3	28		5								36
	A型肝炎ウイルス		1											1
	計		244	130	116	52	11	30	6	1	0	2	5	100

*集団発生を含む

2 細菌検出状況

三類感染症の腸管出血性大腸菌 3 株を検出した。

腸管出血性大腸菌

分離月日	結果
7.25	<i>E. coli</i> O157:H7 (Stx1,2)
9.30	<i>E. coli</i> O157:H7 (Stx1,2)
10.4	<i>E. coli</i> O157:H7 (Stx1,2)